

II. 稲作が始まる弥生時代



西川津遺跡出土の焦げたお米
(島根県埋蔵文化財調査センター蔵
島根県立古代出雲歴史博物館提供)

土器の中に埋め込まれた穀物の顕微鏡写真
上：イネの圧痕、中・下：アワの圧痕
(島根県埋蔵文化財調査センター蔵
島根県古代文化センター提供)

イネ・アワなどの伝来 紀元前7世紀ころの弥生時代初め、大陸から北部九州に伝わった水田稲作文化が、海を伝って松江にも到来します。谷や低地は次第に水田として開発され、稲が栽培され始めたのです。同時にアワやキビなどの雑穀類も伝わってきました。もちろん、水がかりの悪い台地や山間地では畑作が行われました。ここで、米とそれを補完する種実類（雑穀、木の実、こなもの）を主食とし、畑の野菜や、山海の動植物・魚介類を食べる現代の食の土台が成立したといっているでしょう。この時期に食されていたものが、松江の食の原点だったのです。

貝塚に残る食滓 ところで、西川津遺跡では弥生時代の前期～中期（2500年～2000年前ころ）の小規模な貝塚が何か所かで発掘調査されています。縄文時代の佐太講武貝塚と同様、貝の主体となるのはヤマトシジミです。堀尾氏が城下町を造成するまでは、現在の西川津町周辺の低



お酒を注ぐための土器か
(弥生時代終わりころ、
鹿島町佐太前遺跡)

地は内水面となっていて、汽水環境だったと考えられます。やはり、安定して採取できる貝類は縄文時代の佐太講武貝塚同様、ヤマトシジミだったのです。貝塚は貝殻がアルカリ性のため有機質類がよく残る傾向にあります。小規模とはいいながら、多種の山水海の動物類の遺体が多く見つかり、弥生時代の食の傾向をうかがうことができます。

哺乳類ではイノシシ、ニホンシカ、ニホンザル、アナグマ、タヌキ、イタチ、ムササビなどが出土していますが、たくさん出ているのはイノシシとニホンシカです。この傾向は縄文時代と同様で、ニホンザルもそれらに次いで出土しています。たくさん出てくる石鏃を先につけた弓矢で狩りをしたものと考えられます。